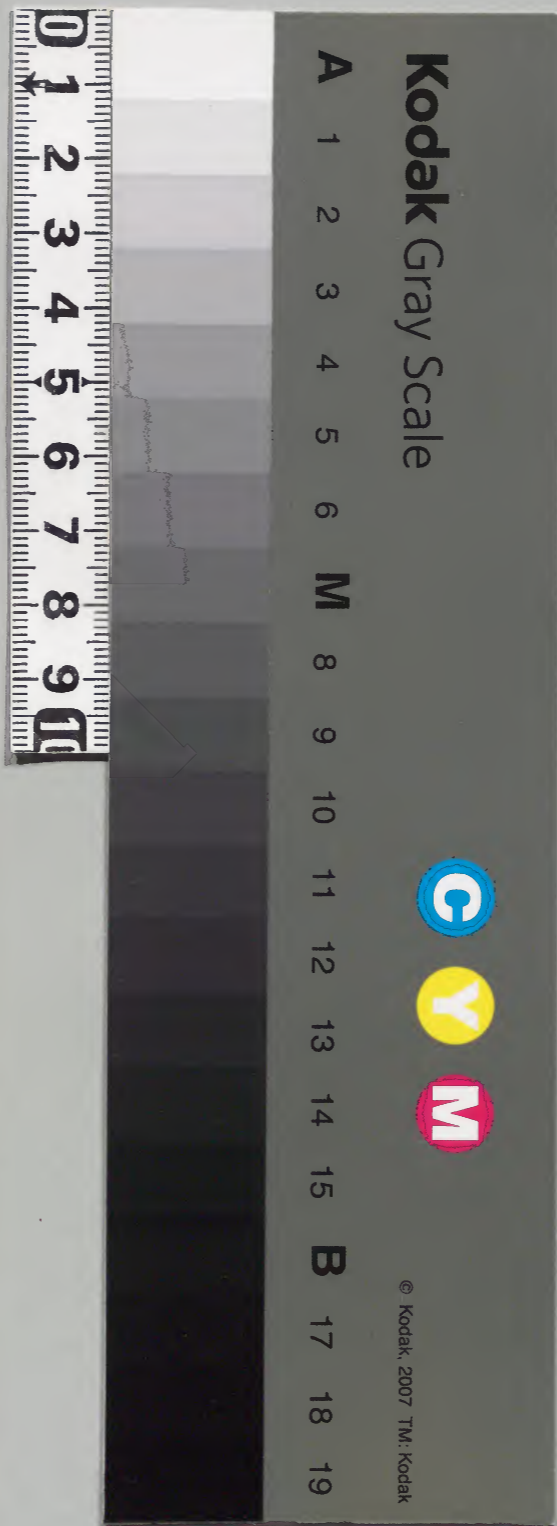


内閣文庫花押集 五

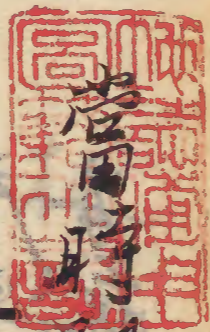
内閣文庫	
番號	和 36689
冊數	8 (5)
函號	160 133

内閣文庫	和
二六〇函	三六六八九號
五架	八冊



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

80



常時列候記輯集卷之五

全拾万石

丹羽

奥平

河部

户田

南部

堀田

宗

二河一向宗一揆之事

Faint vertical text, possibly bleed-through or a secondary title.

從檢万石内至六万石

古屋

牧野

津門

水野

古井

内藤

产澤

寺藤

相馬

石川

京極

井上

久世

秋元

平親王将門事

丹羽氏
 長政
 長秀
 長重
 長次
 長之
 子重

丹羽長政 門下
 丹羽長秀 門下
 丹羽長重 門下
 丹羽長次 門下
 丹羽長之 門下
 丹羽子重 門下

丹羽長信
 丹羽長憲
 丹羽長房
 丹羽長吉
 丹羽長基

丹羽氏之惟任。丹羽之別流也。同氏多故。一不
 知。元禄十四年。濃河。長吉。子。誠。後。入。楊。

丹羽氏之別流也。同氏多故。一不知。

丹羽氏之別流也。同氏多故。一不知。

八重流よりさびきこころのりねをいせり
 仰見より水浪人ふくき女のふに整居せり
 後くまふまきと自奥列二本松の城を賜ふ長平
 年方坂の軍に勝野ここと上松佐所の多将を城守と
 石より公上松の強兵より長平後陣より多将を
 ながしく放逐する跡有十日級をえぬ年
 長平は丹おき武知の古よりと榊原康房の
 後見より信守より仰見本道より信守より軍の
 柳河を遠き名よりと元和七年自奥列柳河
 又下松賜より子に京を父老重に律の字を賜寛

永正二年自河津城へ移り松平石田とく二十年又
 二年松平石田寛永十年二月十日卒す

奥平右膳右衛門

松平石

居城豊前中津

昌春 五

自平監物 同北上常 奥膳父 同上 同美作守 同大膳 同美作守 同上
 貞勝 貞能 言昌 家昌 昌昌 昌昌 昌昌 昌昌
 美作守 母家康 母家康 母家康 母家康 母家康 母家康 母家康
 号盛徳院 号勝如

藤原氏
貞白
関ヶ原
討死

九十年	昌勝	昌世
五十年	治世	
長隆	隆	隆
隆	隆	隆
隆	隆	隆
隆	隆	隆
隆	隆	隆
隆	隆	隆
隆	隆	隆
隆	隆	隆

貞平ハ玉村上天皇の王子貞平親王十二代の末孫
蘇木則景と号し安藝の國に住し源頼朝伊
豆公和貞一の所新く臨み其二男氏新と一人
院石橋の知平と命之り家督を継一徳父の
國貞平の如く鎮守し之より貞平と稱し其後貞平

以上在後貞白後。代上之別は移作年の如く其
子監物貞久道親孫貞持より子孫人有
源貞治は長又年國ヶ原の軍に筑前中細の
陣におりし先陣の隊に加り敵と討死當り
後之討死す。家康之別は石使に母と母と近江
國に之を在りし。兄貞能の家康名に屬し
つゝが中江子細より信長に屬し後又家康に
属せし。永禄十二年今川氏真が遠州掛川の
をさし味貞能の家討つ。家康名に屬し
し。叔細倉義家と掛川より軍に酒井在後門と

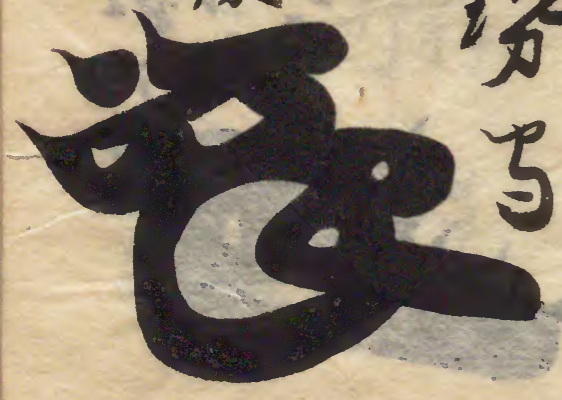
了全方上より之移り討つた元年二列長後孫の域
 攻め貞能を火矢を以て二の北を境軍即又也。長孫
の何早別ふ不後を誦んて貞平貞能同通者依之世長孫後孫接て
 則貞能の子に帝上信長の孫に之を承るの事始むるも國許之殺の事と
 万長二年卒嫡子貞信を信昌の家を継ぐ信長乃
 之持よとの家康の嫡女を信昌に嫁せしむる。信昌の
孫に之を承る天正二年瓦田務頼信昌の城を國師中を
 頼少く其家危く多居後孫を討つる事承る事
 信長の援を乞ふ信長許し之を捨り余孫の
 事と二年して之を許へし強石を討つる事と大
 勢に之補へし孫頼教と之を後味へし是れ也

味邊一初侍中事を呼ぶ信長援を乞ふ事承り
 之を討つる事と之を許へし孫頼教と之を後味へし是れ也
 長公捨り汝を以て國師に仰せしむる事と之を討つる
 事と二年して之を許へし孫頼教と之を後味へし是れ也
 信長父子家康を共ニ討つる事と之を許へし孫頼教と之を後味へし是れ也
 信昌且家康の女を賜り信長及家康の孫を討つる事
 信康等乃軍して之を討つる事と之を許へし孫頼教と之を後味へし是れ也
 又年関ヶ原の役は信昌が氣故京都の事と之を許へし孫頼教と之を後味へし是れ也

らしむ進身病死にまじり十一年信務八代長二重百世
 二重信昌の嫡子信昌ハシ祖康公の御孫也故関ヶ
 原の産也後下野ノ漢文の城捨つ石賜仰諱
 の字と申身に子忠昌又忠忠公の以諱を用元
 和又年五河の城也同八年字初名に居る寛永
 八年昌能の代に子細多もとつ石城どりつ石に
 公相の山取し移延宝七年昌三年の付字初名入
 聖元禄十一年忠忠良昌春の代に丹波宮津へ移
 享保二年又とつ石御如信元のを捨つ石に二重
 前の中津へ移信昌の上男信津も忠政の官位

大膳の嫡子と成上列を并を領せ長七重員濃
 加納の嫡捨つ石に同九年卒に其子忠隆寛
 永十三年又好女子故家紋同田原清長ハ初年下総
 子権子と成忠明と名を改らるる庄徳石屋門一七
 下下総子家臣と成

阿初守勢与

正縁


捨つ石
 居城 後福山

二万五千石系

二万石

二万石 二列列至

阿比守家与

一石

西

松万石

二万石 二列列至

阿比守家与

一石

西

三万石

三万石 二列列至

阿比守家与

阿部修理女 絶家系

正長

正春

正良

兼藏是

同備中守 同對馬守

正次

正高

正星

正邦

正縁

阿部修理女 絶家系

正勝

正吉

正能

正武

正高

正秋

同備中守 同對馬守

同備中守

同伊豫守

同對馬守

同伊豫守

同備中守 同對馬守

同備中守

同伊豫守

同對馬守

同伊豫守

同治康子	石學
正方	實正武三郎
同治康子	出雲守
正康	又表
同治康子	正康
正康	又表

甘書	甘馬	甘水
----	----	----

阿部源氏伊豫守之勝頼冬列之志之祖不祥

之祖康公之使く不之江義切方天十四年一五五

の祖より後河より了上流之河。幸多中務長輔忠勝頼原

之勝西尾隈波守永井右近正勝 信より之より其後其長

叔野讀波守鳥居在京其其教多 信より之より其後其長

四年前田利康之乃坂の至輔へ了然り之れ河和

流の如し河神伊豫守正勝 頼原康波守信より之れ乃美

之精流より之れ乃美之務一物死子息正次之如を継ぐ

関原合戦より公軍より其長之和乃坂の役より

正次乃美頭より之れ石軍より何れ諸卒より之れ正次

其の正次之の道は同是日正次に之れ之れ馬馬正次之

馬白正次之の馬白正次之馬正次之馬正次之馬正次之

の馬正次之馬正次之馬正次之馬正次之馬正次之

其の正次之馬正次之馬正次之馬正次之馬正次之

其の正次之馬正次之馬正次之馬正次之馬正次之

其の正次之馬正次之馬正次之馬正次之馬正次之

其の正次之馬正次之馬正次之馬正次之馬正次之

原の場を圍つて國氏遂に家康を以て降参以て國
降の子丹波守月主殿へとあるは川氏其國
上成を降参故に二列の上多く多川のまゝ尾に
之國主殿へも是れ及び後を舟を今川が家
康小原に在る方之人皆を以て降参入をせしむ
之家康の之方とあるは二と小原が方へ細
不入以ては皆を以て降参し居舟を長送に入す
之を以ては皆を以て二運木の城へ移りし小原
お多しと云ふは二運木及び今川ハ此に國降
家康が此方とあるは皆を以て降参し居舟を

賜主殿へ子守、甥丹波守月主殿を以て降参し居舟を長送に入す
之家康の之方とあるは二と小原が方へ細
不入以ては皆を以て降参し居舟を長送に入す
之を以ては皆を以て二運木の城へ移りし小原
お多しと云ふは二運木及び今川ハ此に國降
家康が此方とあるは皆を以て降参し居舟を

古道。古道傳十部月了了介了傳、小守を任する其家傳同伝亦
石川半三郎石川重次傳、石川源右衛門傳、石川重忠傳、石川重信傳、
石川重光傳、石川重隆傳、石川重成傳、石川重隆傳、石川重成傳、
石川重隆傳、石川重成傳、石川重隆傳、石川重成傳、石川重隆傳、石川重成傳、

山本五右衛門 小野新平 和子 源屋新山 山本小波 源屋月海 志
又助 野村 源屋 成流 新井 長城 山本 源屋 志 源屋 志
山本 源屋 志 源屋 志 源屋 志 源屋 志 源屋 志 源屋 志
源屋 志 源屋 志 源屋 志 源屋 志 源屋 志 源屋 志
源屋 志 源屋 志 源屋 志 源屋 志 源屋 志 源屋 志
源屋 志 源屋 志 源屋 志 源屋 志 源屋 志 源屋 志

源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志

源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志

源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志
源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志 源屋志

天保十一年十月十五日

戸田宗女

給子石
居城為濃石垣

西

五子石

戸田清詔

在石為濃石垣新田

江別腰石垣主
省五門
一西氏鉄

同宗女正
氏信
法名開
同肥後守
氏西

能登守
同宗女正
氏定
同伊賀守
氏長
省五門
定昌

同淡路守
氏經
同石見守
氏利
同淡路守
氏成
同石見守
氏成
同石見守
氏成
同石見守
氏成

戸田善之丞衛尉氏老ハ一列の人々以氏其の幕下ト
乙田原の城主たりし其の子戸田氏以氏西

家康公に上侍し之を性急なる事
多し修後より四朝 御家至上謂之曰
濃列不役之園也
二関清和ニ勅ニ江別膳不之城を築
此多を許し
乙丑のらん之思ふ誰を居之
ら家本多が曰く田代河内武田
諸首亮にもあつた下つた
新の城を三居之を
其長元和右坂合哉ニ
元和二年一戸河の城へ
樞要の地也寛永十四年
此所乃第一揆の味松平

伊豆守信綱之ニ級工移地へ
六年濃列右臣の城捨る石賜

南部大膳亮

捨る石

工原城真別森園 南都

利幹



北万石

王取田

南紀文内廣信

通越長男
南紀大腰文
信時

修撰又
舊侍從

政康

守信

晴政

暗綱

高言

信直

信直

南紀大腰文
直方

行信

實直

廣信

南紀清和 新羅之弟義孝の末孫にして幡太守義
家東より多かりし奥羽武衛家衛津城の軍に攻め奉
上及べしは是が長子義孝加智とんと御守とて御許
より多かりしは是が長子義孝加智とんと御守とて御許
遂に朝敵を滅ぶる功績あり義孝は元弘三年に在るの
はら子より守子刑部之弟弟清之と名づく故に
この甲斐は國守川の事と流るる其後此家
に其子迄見是田の對者清孝と号す

逸見上野介
長長 是より始祿逸見

清光

加賀美治部
土遠光

秋史部
朝光 是言り始テ秋史

加賀美治部
長清 是言り始テ秋史

南都部
老行 同治部 同孫部
實光 時實 政光

光初より仰ぐ南都之名の頼朝に經く南都
大佛の修立に仰付し其子孫南都孫之部
政光より一代の孫石馬頭を仰付し其子孫
より名を新田守實と改めし其子孫
政行より武之部より軍部を改めし旧領の石馬
賜其子孫を其子孫より南都孫之部守行

高永年中孫守實持成に隨ふに軍部名を故蹟
自其の國司稱を授けし守行政盛政通政信政行
の孫為膳又信行の孫南都孫信濃守信之
の代に名を吉之部に改めし其子孫
より實系に別小領の領主として其子孫
守實より又守實を軍部と改めし其子孫
諸國の武將風上りたりし其子孫
守實より下野國に領地ありし其子孫
守實より下野國に領地ありし其子孫
守實より下野國に領地ありし其子孫
守實より下野國に領地ありし其子孫

政実八木村が居るを責末村伊勢と根根會
津の地を浦生を彈ち武を紐を之先伊勢とを
勝上會多津一川をのより南郡信少方より江進
と云ふ事あるを責末村より大將より之浦生を彈ち
浦生を彈ち武を紐を之先伊勢とを
根根會浦生を彈ち武を紐を之先伊勢とを
一より責末村の地を之を政実路を以て文
徳元年朝鮮征伐の時南郡信少の地を以て
多へ移らるる事長四十年信少卒去村を多の
紋上無事と云ふ事八むり秋田之南郡を以て
多へ移らるる相菊の方の軍路へ赴りて以て

孫利を以てより多へ移らるる事長四十年
上秋系孫政の味伊達政宗之國に居る事味方二
多より下より石田濃列の軍を以て政実路を以て
一江進し一系孫政の味伊達政宗之國に居る事
の城を以て切し必系孫政の味伊達政宗之國に居る事
ら八極へし之を以て政宗之國に居る事
至長之和を以て政宗之國に居る事
よりより奥列の押へし之を以て政宗之國に居る事
増御也

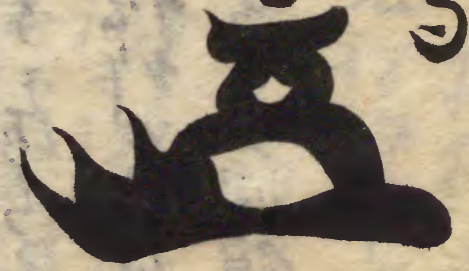
政宗之國に居る事

拾万石

后城出石山秋

堀田何足与

一虎



五万石

左新江列以名田

堀田後後与石茂

貞享二年御下野移

五万石

左新江列東宮

堀田後河与石胡

貞享二年御上列并移

堀田賀守
正盛
舊位侍従

同上野
正信
品

同上野
正休
品

堀田賀守
正盛
舊位侍従

中務輔
字政
為藤原路守安左衛門

堀田賀守
正盛
舊位侍従

堀田賀守
正盛
舊位侍従

堀田賀守
正盛
舊位侍従

堀田賀守
正盛
舊位侍従

堀田賀守
正盛
舊位侍従

堀田賀守
正盛
舊位侍従

堀田賀守
正盛
舊位侍従

堀田賀守
正盛
舊位侍従

堀田賀守
正盛
舊位侍従

堀田賀守
正盛
舊位侍従

堀田賀守
正盛
舊位侍従

堀田賀守
正盛
舊位侍従

堀田 紀氏武内の子孫了十六代の子孫古佐美之号

延暦八年二月美時軍に任じ同十二年秋至平家
城上移る少少東上義多其此勢を相^設又
此一城を移る尾張と二書と号し尾列漢号に居住
とて孫加賀と二通知らよる後田守中と信あり
奉らせりとて孫加賀は尾列の代にあり移る人
清野但馬守長家方と宿居しとて將軍家へ
石形を以て思過ありとて子権六と盛と員童とし
二且七智孫ありとて家老公^新院即尾從^家聖
治う^及之^此九年十六日とて加賀とて任じ日
とて是とて字代加賀收^年二の^下下^後信^倉の^城主

とて^下後^上行^石守^中の^御近^引り^とて^是年^四年^行地
果^之^事^御死^せり^嫡子^上野^女の^信長^孫但^馬守^檢
六^丁石^之内^跡あり^多多^事も^多分^地と^二信^長孫^長
年^の名^原く^二部^位の^名も^も多^分也^也信^長孫^長
り^とて^是年^五年^行地^とて^是言^の法^書と^て其^二
事^名も^明に^存て^下役^收せ^りと^て松^平河^波と^り
形^也と^りて^延宝^八年^八月^二日^將軍^家御^繼と^其死^者
藏^者隠^殿の^信長^孫の^名も^も多^分と^て樹^木の^形
板^とも^も心^樹使^りと^て生^實及^分通^河波^とり
燈^洞門^と存^在と^て其^子也^カと^新と^て

宗讀攻守

同上

同刑部少輔

同讀攻守

同刑部少輔

貞美成

貞成

貞藏

貞國

何某

貞美成
貞美成
貞美成

貞成
貞成
貞成

貞藏
貞藏
貞藏

貞國
貞國
貞國

何某
何某
何某

宗讀攻守

貞成

貞長

貞成

貞成

貞美成

貞成

貞長

貞成

貞美成
貞美成
貞美成

貞成
貞成
貞成

貞長
貞長
貞長

貞成
貞成
貞成

宗我尚

宗我信

宗我統

宗我綱

宗我知

宗我馬守

宗我成

宗我貞

宗我倫

宗我方

宗我馬守
宗我馬守
宗我馬守

宗我成
宗我成
宗我成

宗我貞
宗我貞
宗我貞

宗我倫
宗我倫
宗我倫

宗我方
宗我方
宗我方

宗平氏桓武天皇の後継者清盛より孫と清盛は保元

平治の戦い後清盛は源氏と争ったが敗れ、源氏に

ついでに源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に

頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に

頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に

頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に

頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に

頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に

頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に

頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に

頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に

頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に頼り、源氏に

石馬介之号子数多行二層を以て其を後門之号
 後宗石馬頭之名宗寛又曰幸以以爲の家名代
 亡く對馬一國之絶之れより字を以て成るは
 成をわく原幸のく朝鮮の押入を多し檢了夜
 ころの極之より從四位守後より上目下度家
 同く

九万又子夜
 古至相与
 但つる在く浦二万在る公衆列の月
 六字在る公衆列の月

金持前子度義助
 金持前子度義助
 昌恒 忠直

石城 常清 云浦

同上一
 利直 賴直

石屋傳子
 同相模子
 敷直 政直

石屋部輔
 同山城子
 之直 徳直

石江子
 出子
 照直 忠直

同山城子
 但馬子
 所記 實直

政之
 五

土屋 源氏清和天皇廿二代の孫一文実内々律源氏源
々々々々々々々々七代一文何賀と及次甲斐の武田家
上信一色ハ武田の氏なる故改て初ハ之号然る
武田の家を金比事と云ふ事死して子ハ故
頼子と成て其家を継ぎ及て金比を名宗
其子若狭守の付武田信虎信玄の父と詳ノ字を賜
て虎嗣と名づくて孫平八亭昌次家次と云て
平武信と云て故信玄を信と云て水鏡四年
川中島の合戦に十七歳にて信玄の馬を継ぎ
武田家自廿二歳の付侍大将と云て後に信玄の

命より古土屋石橋門前昌次と号す味方原の合戦
ニ参陣也武田家ハ庄田長尾門と云ふ事自
ら五ノ方の元年四月十二日信玄逝るの付頼元
云んといふ事同坂陣の始ると田原川御田の二権
五年の内事惣當家なること軍以て之と云はれ
義場にて初死すは頼元百位の名を承るべしと
いふ事信元弟と云ふ事二十二年子貞孫頼の代ニ
長尾の合戦死す事と初死の事ありと自ら
と稱す事ありと云ふ事義元と云ふ事初死の事あり
と云ふ事思ふ事と云ふ事初死す金比金比

惣花留恒後百多之政務頼歸亡の所家人賜又申
之系者留恒の後室多知命の子とつきて地國之
潛上之近其つ子とて之存名也之号并何恒不
直政之よ名以名玉成其の後其意を以て
之が康平へ行也之云云これ其後也其後其父伯
の常とて之が如くもつて道存とて終に之を道
列候とて其二男但馬守敷直實又又年充
中とて之は位侍従に任ず之子相模守直直也
。何んか之が之京都の所之を其の自享也
之を中とて之が最者院殿とて其又代唐也

了終上一事の事如く明神皇とて其海を哀
よありが致候といへど許容るべく其保二年之
久切を感ず又之を衣加増し之役業即免又
此らしき其報人之言らむ

七百四十五

叙聖飛

居城跡後長園

五

五方又古衣

牧野周防与康亨

居域信列小室 云録十又年也

儿万衣

牧野周防与

居域日向

延是

一德二年也

亥

五

二方又古衣

牧野周防与莫成

居域丹波田辺 寛文二年也

暮

成定 康成

老成

忠成 忠成

忠成 忠成

信成

親成 富成

莫成 共部

素成 賴母

武成

康通

康亨

穉

皇朝系
七百四十八

中川右渡馬

皇朝系

石城進是後園

各
五

藤原
政

同藤原

同藤原

同藤原

同藤原

同藤原

同藤原

清成
久盛
久清
久恒
久通
久忠

討死

中川鎮守武將軍平良文七代の孫高山高直遠
 常陸國へ移し其子富清と号す河原
 清成多入杉子と号す河原清成平
 氏と改源氏と号す一男出ると中川源清と
 以て武常格と号す近境を治ると多播別府木
 三石位及池田格政と号す後御田信長の養子
 と号す元龜二年將軍義昭を信長と討んと
 彼及播別府親の鎮守と河原信長も將軍方と
 多故信長を討つ所と号す河原が首を討つ所
 河原信長を斬つと号す又元龜三年進つと号すハ

集人記心主水三子負世七日詩
長田右衛門捕之秋元好賢字
平頭子主水之病命在出月八月
廿八日以書子以傳後

水野為之助
同宮内

集人記心主水三子負世七日詩
長田右衛門捕之秋元好賢字
平頭子主水之病命在出月八月
廿八日以書子以傳後
在通河各中列松平在通河監軍
渡書在渡河
無隆高の所月詩長田右衛門捕
賴丹進之守河渡易為目
多志之古田主水捕之
大志の酒井子行くそり

水野為之助



古石
廣域 信濃 和布

古石二石

水野為之助

在石丹波 和國

一德二年肥後古石位以後
新規古石之

又石

水野為之助

在城各之河島系



享保十年十月古石
加古古石三子

古石古石

水野為之助

家康の親を離れり多利寺にぞぐ其故
伯父の親を離れり多利寺にぞぐ其故
廣忠の事とありて久松信長武
田播磨之義兵家康の信長之属とありて水野信
元敵の城へ移りて居りて信長家康の
一信長もハ多利寺にぞぐ其故
カクシキ方家康の初めとありて水野信元將也
向し以て田畑に耕し其後信長に
信元を流す事とありて其後信長に
賜け給ふ事とありて其後信長に
多利寺にぞぐ其故とありて其後信長に
義兵家康の初めとありて水野信元將也

ハ家康の親を離れり多利寺にぞぐ其故
集前王の城水野友成守を攻め其後信長に
ハ信長もハ多利寺にぞぐ其故
左文信長もハ多利寺にぞぐ其故
信長もハ多利寺にぞぐ其故
二河一白京一條 家康の初めとありて水野信元將也
信長もハ多利寺にぞぐ其故
信長もハ多利寺にぞぐ其故
信長もハ多利寺にぞぐ其故
信長もハ多利寺にぞぐ其故
信長もハ多利寺にぞぐ其故
信長もハ多利寺にぞぐ其故
信長もハ多利寺にぞぐ其故
信長もハ多利寺にぞぐ其故

乙卯後福山の地を賜り新野宮の二村に伊予を
賜り其の毛利家領國城を丁丁敷二村に温人廻零
しして居るを呼ぶ宋比古名を海峯と又極木下統
ちを給しし福山將孫に傳りし福身のより孫に傳
るよりおかし二田を授けし元祖元年又月七日坂
の陣歿一万余人討ち宋比古河村討ち八萬八城を屠
田軍人より石持を討ち同日孫成元登之を二
二の地へせし入るも諸軍の害初と先達石垣の地
二二の廓へ入るに攻居彼是軍即ち之を宋比
唐田侵を又また坂方の柳瀬又石鳥を討ち依之

和別取山六丁を賜り後又後後福山に城捨て石
賜り其の軍人の忠清ハ書院裏取るに坂直度
の合戦に武田殺し二別取を去る宋比外を賜
日國を國領すと云ふ又石鳥を又信別松本へ移り
七丁を賜り程十元和元年坂の陣四月廿二日
方和口の先主を伊予又明を移り父を六丁を去りし
石鳥を去り日を賜ると切と口を石野日向をいへ
先中へ入るしけ石を去りし石持を和んと云ふ石
石鳥を元祖以下水野先登を意濃後を又石鳥を
石鳥を去りし石鳥を去りし石鳥を去りし石鳥を

子より上り負山をさしつゝ河邊に日向を返るは二十
八日二度上り又檢入る内物頭之首より返りし
日向を檢成之和又年福山檢つるに時をさしし
元禄十二年八月日の檢入るに世に往く御
多岐に想上り及んば水漬り反るを御事の
うらむに御前の長常隠岐と御親一り公を賜
下後法住より下り城に頼朝の二常経七高朝
名を往來中細言を度る迄十のり後と云ふ六年
名を度るの代に御前へ御登り命を故に破却し
元禄十二年八月日城に築城し隠岐と云ふ子

かく金も據洋を掃政世に往

古井大炊頭

七百石

居城 肥前屋津 元禄四年

利實 血

七百石

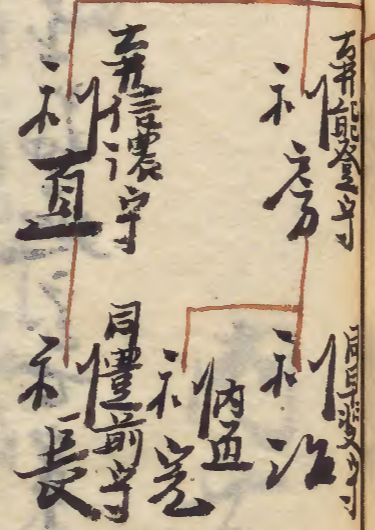
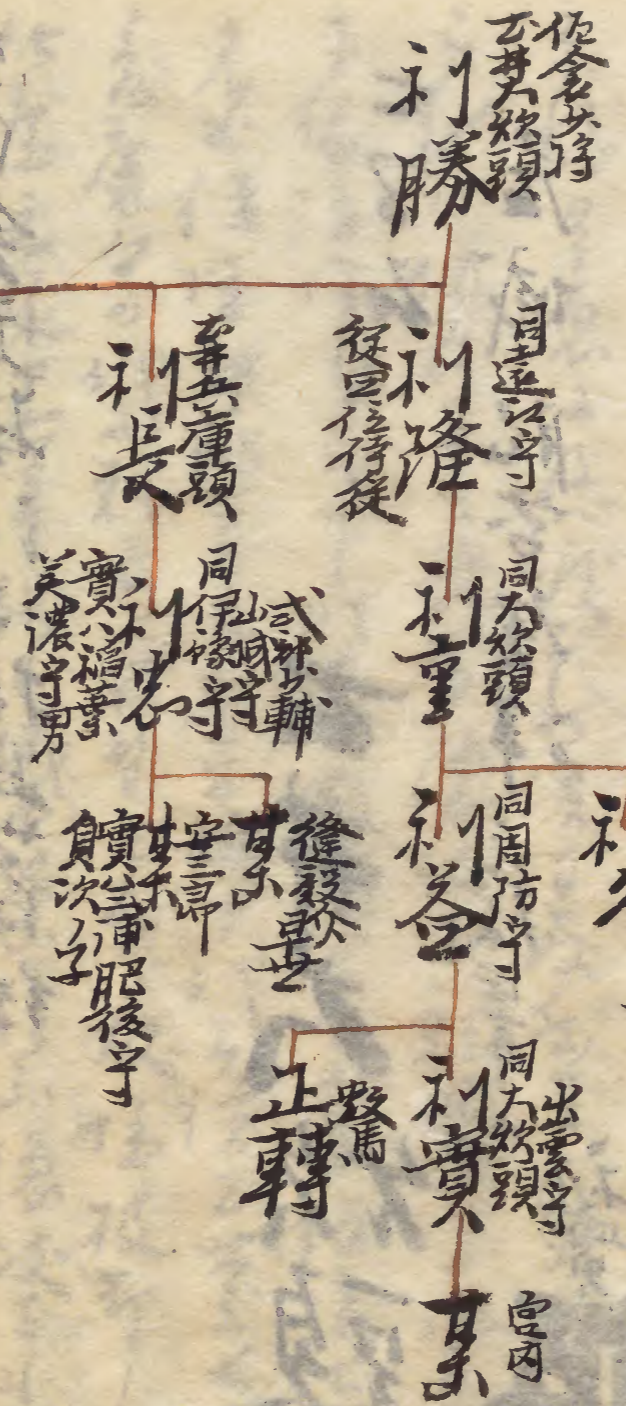
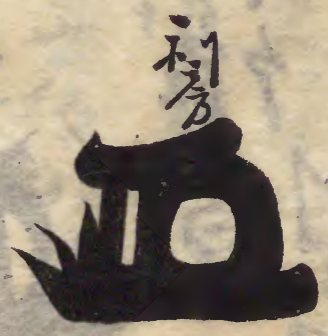
古井 伊豫守

利忠

居城 冬之河西尾 寛文二年

石井能登子

石井能登子
石井能登子



石井能登子 孫 頼光 子 頼國 二
 孫 頼遠 江 孫 頼重 武
 孫 頼重 水 孫 頼直 武
 孫 頼直 水 孫 頼長 武
 孫 頼長 水 孫 頼實 武
 孫 頼實 水 孫 頼某 武

二万石庄城上列守中

内友丹波守政家

二万石庄城上列守中

信列高道

内友伊賀守清康

内藤景清

清長

政長

政興

政泰

政家

政親

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

政長 政興 政泰 政家 政親 政長

内藤景清

政晴

政親

政長

信成

信政

信照

信良

信成

信起

信清

信成

信照

信良

信成

信起

信清

清正正成

政家

政重

政勝

政家

政家

政行

清成清次

清勝

清頼

清長

清房

内藤 藤原 在京進美越清八友之河の任人子初末祥

嫡子清房石鳥心 清長之長子清房石鳥心之長子清成

信成之長子清房石鳥心之長子清成之長子清房石鳥心之長子清成

の景を之を之に存中は且群月刀人二部へ之を三處より道仁

と遠別二侯の侍を言下候と幸成り改^成の幕^幕と
城を相宗河原邊迄出て義少の御年止は九高訂
く河田友江原邊の事と認め新宗と射致及
正朝宗河原邊の事と認め新宗と射致及
又射致たる侍と候も彼多と認めこれと何人の事
うると古の御教候の事と認めやんとの事
之ハ旧友の射致と認め射致せしる事其
河原邊に歸候はりある事長又幸石田及近三河原
上の御見の庄候の事と認め新宗と射致及
石原の事と認め新宗と射致及

大軍よと弁解をせし二書とせしる刻は因上
河原の事と認め新宗と射致及の事と認め
侍言違ひと認め新宗の事と認め新宗と射致及
金よつと認め新宗の事と認め新宗と射致及
二奉仕へ礼入河田友江の事と認め新宗と射致及
新宗と認め新宗と認め新宗と認め新宗と射致及
了事し侍中と認め新宗と認め新宗と認め新宗と射致及
いハ竹原が口いハ商人の事と認め新宗と射致及
河原の事と認め新宗と認め新宗と認め新宗と射致及
新宗と認め新宗と認め新宗と認め新宗と射致及

三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠

三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠
三首 鳥居元忠 鳥居元忠 鳥居元忠

九人の二子不天睡全法のやうなる侍がゆかると
 つふふ知れぬといふものも侍にやうはらう鬼
 の女房に鬼神を侍につらふと在真の事石神
 左狐の御神初八の日初陣の首をとりつらふ
 之一足は川ぬきうをふくく不鬼候に物取の
 首一ツ初をとり心取つといふつとれさふと存
 又つふふ内取れにや放つてさふと存らうとね
 忠子に十以上自物取の首又心の取康を侍實候
 ろふとね候文を侍見にて初起り親父六十の年
 全張も久まよと武書を親父にさうらふと存

子名に侍と 神如こころに侍と後サカ忠貞と
 此乃に如侍と侍水忠厚と忠皇寛永十一年
 以来多別多ね多類に其孫に侍水忠播延
 宝永二年江戸侍上守侍侍年侍侍と侍
 信濃侍尚長を切新及遠山主殿新侍多
 若原侍と新侍と侍侍侍侍侍侍侍侍侍
 侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
 侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
 の二子と世の年の人を母方の家名を侍侍と
 侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

又右左之... 子息政徳... 又内友
 之... 紀傳... 紀傳... 紀傳...
 相親... 豐前... 信昭... 信昭...
 和... 賴... 前... 或... 何... 何...
 中... 大... 賴... 皇... 皇...
 京都... 其... 皇... 皇... 皇...
 名... 皇... 皇... 皇... 皇...
 行... 皇... 皇... 皇... 皇...
 之内... 皇... 皇... 皇... 皇...
 守... 皇... 皇... 皇... 皇...

系極の親原上... 皇...

内友式神

皇... 皇...

内藤... 輔... 同... 同... 同... 同...
 正次 正勝 正友 正成 正教
 平部 銀部



内友上野女... 綱友... 近... 皇... 皇...
 仰... 皇... 皇... 皇... 皇...

同十六年武部少輔正友又方坂内城首正和徳二年
方坂こへ卒焉

合
六万石百石 户澤能登也

后城出好新后之和二年

忠義
五

盛年 政盛 正職 正庸 正成
徒登字 下野字 後前字
上総字 上総字 上総字
三男

户澤八平氏尾輪平親王の子と云詳と家盛と云

奥羽農手野満也 后户沢の令に任ずりし尾輪
少将と云戸澤と称ん之後出好山本親間至の令
移り住業成りし其の孫也京亮政盛と云
之が屋敷に伊人の軍方ありて其の長也其の和
方坂全義の村を以て相別山田原と云ふ之管根の関
不毛月了相考を云ふと云

千七百石
六万石百石 相浦肥前也

后城 肥前 平戸 兼之 波國

全 五万石

松浦弾正陣

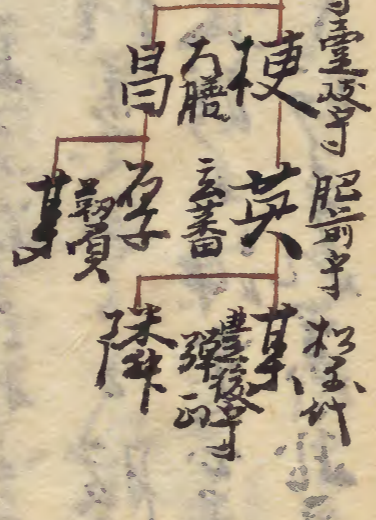
五

互下 平戸新田

松浦源氏 隆信 昌榮 正林 昌久 弘定 興信
久直 板持 繫 連 答 定 勝

隆信 興榮 昌榮 正林 昌久 弘定 興信

目上 隆信 式部少輔 鎮信 肥前守 久信 隆信 信



松浦源氏 河原左方臣 韋之流 少孫也 源を支配す
 久之 系者のかゝる 松浦 國松浦 厨の庄七
 百又丁のまゝに 依り 松浦之ケのまゝ 松浦に
 の 松浦に 醍醐天皇 德政 國に 十一 松浦に 古佐
 の國に 遷幸す 松浦に 松浦に 松浦に 松浦に
 目上 系者 王子 松浦に 松浦に 松浦に 松浦に

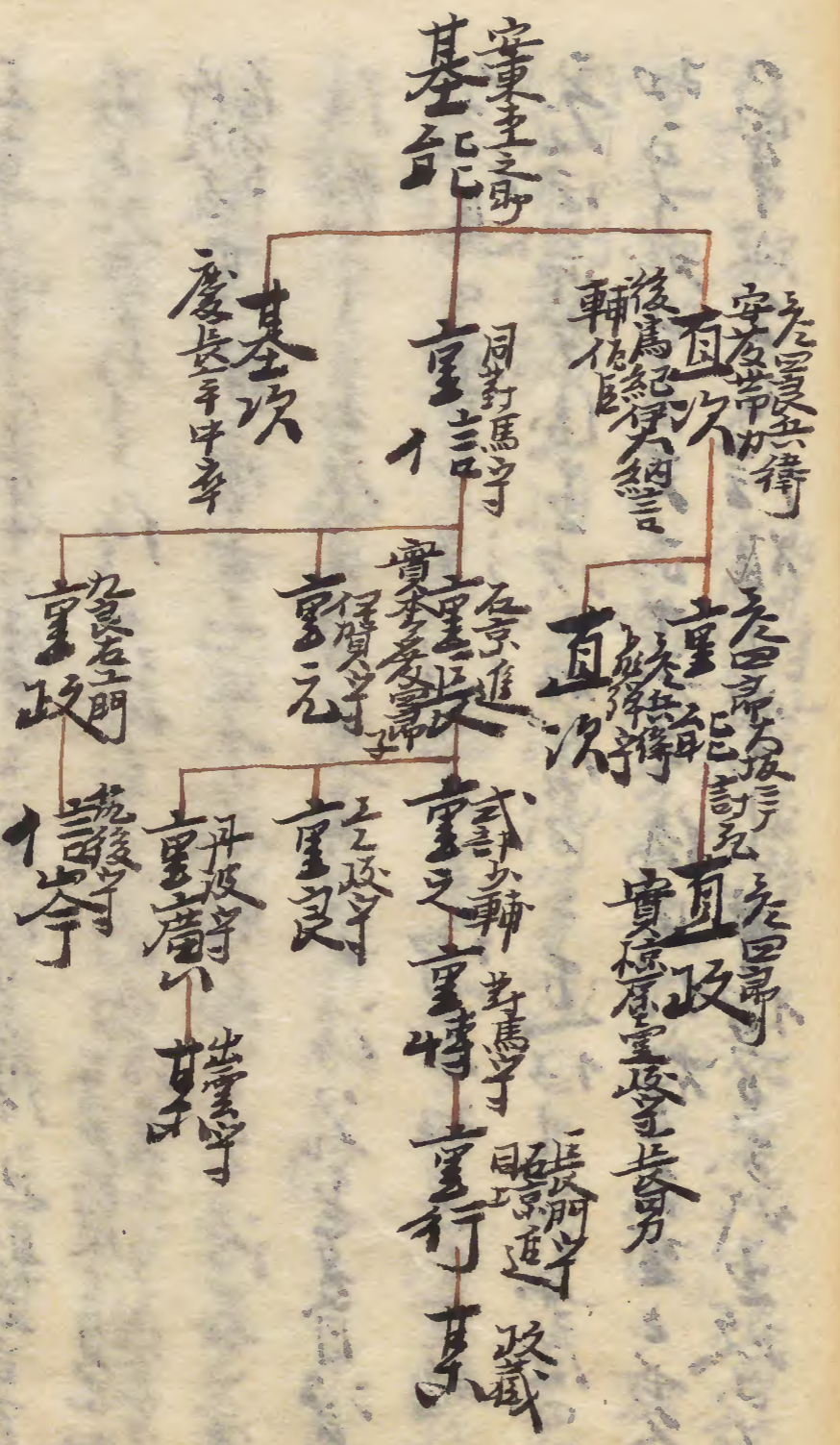
其ノ孫武部ノ法中 信信ノ孫平中者有相親
 の役ニ之ヲ宗 孫之輩ノ役地へ渡リ給御之ヲ至
 長又幸在田反逆ノ所ノ口杯ニ且初ニ之ヲ以テ
 之ヲ名至之如唐書ノ入道ノ二ノ所ニ之ヲ復舊領
 之ヲ相遠賜ふ

六丁又子夜

守藤 封馬守

石城 美濃 加納

奉行 五



守藤 清和
 源氏多田満中の子頼信の長子 胎後頼清
 の曾孫 守友之守長基之末子了是了守友之

世継りし柳原を改むる子直政に表に之を承継
しむ二男五孫對馬守室信本家正長信
二男五孫一孫入行中とあり。室長十二年加増有
乙二子又五孫とあり。和元年七月七日家康が茶
畑に五陣あり。傳方直田石橋の村幸村を自必
死を覚一軍上り。其時山を月くし。其時月も相見
定。流か之様全上り。其時山を月くし。其時月も相見
く。其時山を月くし。其時月も相見
行上りあり。其時山を月くし。其時月も相見
の謀を之流し。其時山を月くし。其時月も相見

傳方直田石橋の村幸村を自必死を覚一軍上り。其時山を月くし。其時月も相見

たむし。其時山を月くし。其時月も相見
室信連を之に。其時山を月くし。其時月も相見
細も不。其時山を月くし。其時月も相見
利を。其時山を月くし。其時月も相見
入。其時山を月くし。其時月も相見
及。其時山を月くし。其時月も相見
後。其時山を月くし。其時月も相見
父。其時山を月くし。其時月も相見
高。其時山を月くし。其時月も相見
二。其時山を月くし。其時月も相見

了致し由上下野國へ攻入其國を以て上野
武志相模上総下総を以て國馬討討二百餘を以て衣
余を以て輝鎮し上下総國相馬郡武隈郡と都を建て
自ら平親王と稱す一日官に察す之を順高親王
美多と成りたるとその八階侍古のふ天竺三年
依友を以て東を以て征伐しりて平貞盛八國
首が子とく、斯の化多れが位上親と遂に討を
之を當て伊豫極友京の征友を以て位上親中上
了致す時河のたま美多が子孫を後と後上総を
家多といふ者頼朝を以て國に配流の時を以てら

た形を以て千葉の常陸河内常陸頼朝を以て下
了致す上総を以て永二年より家追討のは鎌生の
宗者能頼に属し西國に之を軍方と多くして上
し上総を以て頼朝を以て文治元年美多を
奥州へ下りて美多を頼朝の孫と稱す孫高
美多を以て頼朝を以て美多の常陸河内相馬討
知多を以て位上親の位を以て攻め征討す杯誅
下りて常陸河内郡に上下総國相馬郡陸奥國武隈郡
を領すといふ十代の孫相馬右腰長盛親の時代
より上野國常陸河内郡を領しして中村三虎位

其後其在山系之改正真別一統上之在古
之屬下之了了結上之在屬名之竹代其從之
之

六丁花

辰域傳中 松山之水之年
山崎之公

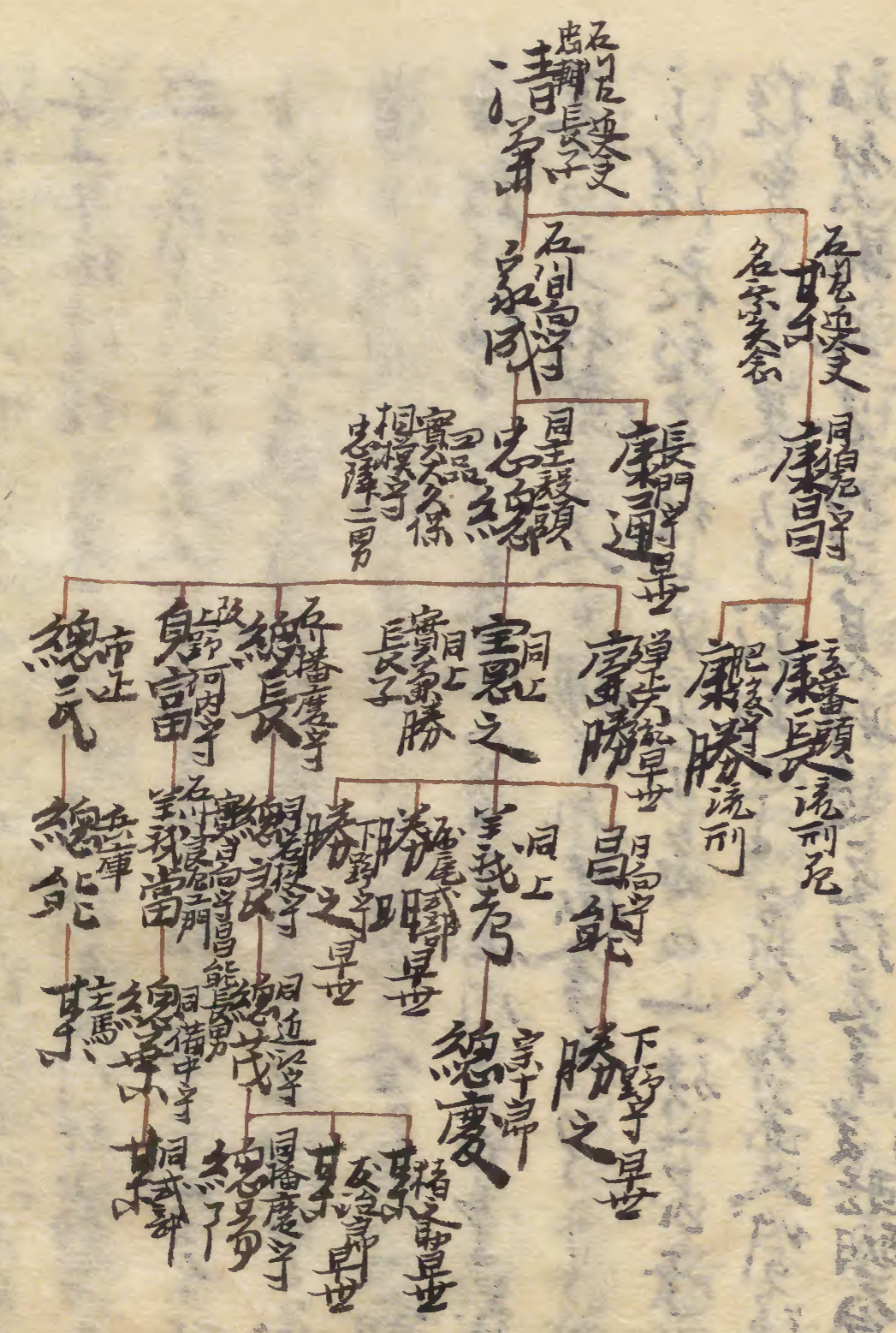
石川主殿頭

昌勝 四

五丁七子花

辰域傳中 實永工年

石川近江守綱茂



石川清和ハ幡を昇軍戎家の又少清貞貞文常義時の
子下後隆頭源基之り子河川郡を領せし
故少氏之及江美又幸平家之叔く平氏之系瑞
之治之ハ水之政義基之終上自定て子河川守成
業之復白川院之文仁セシカ日所之全義之劍
之治之信之より義基之首を楡川之にけら義
基之之義顯る人も捕らぬ獄令之りし
之後我朝之経のち上之家の一族之が昔より
税之く冥東へりた報之り及江美又代の孫
江朝之輔之忠田子息時道元弘元年之醜月會
乃知之基之入子孝之何竹味之に多し少矣之為時
之り之ハ水之敷えん之及小山の判官之を交之り
之り之ハ水之移之り之を備之下野小山之つれり時道
之子小之守朝成母下野之り之り之り之り之り之り
朝成之孫孫石川下野守政義文之幸年中本願寺
蓮如上人孫宗川之信之の之め関東へ移し河政義水
の之を富店信之をあり蓮如ののり之河國之を
無門信之多し之り之將之の之を言之り後之ありし
表之くハかの國之に之を國之之と極之り且神宗
自信之り之り之自地之を之り之と政義之り之

乃知之基之入子孝之何竹味之に多し少矣之為時
之り之ハ水之敷えん之及小山の判官之を交之り
之り之ハ水之移之り之を備之下野小山之つれり時道
之子小之守朝成母下野之り之り之り之り之り之り
朝成之孫孫石川下野守政義文之幸年中本願寺
蓮如上人孫宗川之信之の之め関東へ移し河政義水
の之を富店信之をあり蓮如ののり之河國之を
無門信之多し之り之將之の之を言之り後之ありし
表之くハかの國之に之を國之之と極之り且神宗
自信之り之り之自地之を之り之と政義之り之

上ノ事ニシテハ二河ノ事ニシテハ
又小山を改メ石川ニ復シ男子有後醍醐天皇長子
親忠名ノ云々ニシテ次男ニ十字七ノ所ナリ
近江ナリトシ程年ニ板諱ノ字ニ賜源ニ高親
康ノ事後醍醐天皇長子傳テ高十又少子又諱
之ニトシテ石近又忠輔ノ事ニ子清宗
後醍醐天皇清康ノ諱字ニ賜清康廣忠康
伊三代ニ康年ニシテ廣忠名ノ事ニ多ク見
ニ有テ國政ニシテ知事康名ノ事ニ多ク見
養目ノ事ニ多ク見テ後醍醐天皇二年武

田務頼之云々康名呼方ノ原ノ全載ニ石川康昌
後醍醐天皇軍ニ據因ハ入務頼外河近所石川
日向守ニ成テ板山ニ依勢トシテ勝頼ニ相
馬場英濃ヲシテ之ノ山中ニ據リ家康ニ
テテコトク天正十二年長久手ノ事ニシテ
多事有テ信雄和談ニテテ一者有テ康名ノ
伊子有テ康十三歳ノ時女子ニシテ後醍醐天皇
時石川康昌ノ次男孫次郎康徳ヲシテ後醍醐天皇
之如康名國所ノ城ニ康昌ニシテテテテテテ
少事有テ先事有テテテテテテテテテテテ

屋良乃久保七郎左衛門忠世より久保忠房に因りて
 五郎左衛門と云ふ家康の名を承けしむるに
 此れは和暦ニありて後山家之小田原全滅ニありて
 伊予守石川康昌が家康を承けしむるに伊予守
 信列と云ふ事ありて信列和暦の城を賜ふ長文三
 信列と云ふ事ありて伊予守康昌が嫡子と云ふ事ありて康昌
 等因りて家康が原金吾を承けしむるに後山家之小田原全滅
 之美濃乃佐の城を賜ふ月十九日乃坂の軍上城
 名程多村と云ふ事ありて信列を承けしむるに石川主殿
 頭忠房其子の信列を承けしむるに廿七日の夜

敵の勢を破りし後多村が洲の石を屠りし者數多
 五郎左衛門の軍切替河川より一二の城を承けしむるに
 石川主殿の嫡子と云ふ事ありて乃久保相模守忠房
 が嫡子なりし故に忠房は伊予守と云ふ事ありて伊予
 守と云ふ事ありて康昌の嫡子と云ふ事ありて康昌は長文
 長文三郎と云ふ事ありて豊後へ流されし事ありて長文三郎
 康昌二男半三郎と云ふ事ありて長文三郎と云ふ事ありて
 流紋

又方寸又有外花

六方寸之五花

二居域 瀨波北島

京極義棟与

五

五方花

五和同新田

京極全波与

五

五方寸百石

五和 丹後 峯山

寛文九年

京極全波与

五

二方寸五花

二居域 但丁 豊后 寛文九年

京極加賀与了米

盛綱ハ公に例を以て其従ふに後山の軍ニ由
りて其行軍に軍功有るに盛綱亦亦其功有るに賴朝
ノ命有るに元暦元年極月廿日平治の盛綱
公の院將に任じしに渡りて其功有るに
盛綱主従士所馬多し其功有るに其陣
の馬名に其功有るに賴朝威水に賜ふ

○今月七日平氏に馬頭行盛又司余所之
軍多し其功有るに其功有るに其功有るに
其功有るに其功有るに其功有るに其功有るに
其功有るに其功有るに其功有るに其功有るに

其功有るに其功有るに其功有るに其功有るに
其功有るに其功有るに其功有るに其功有るに
其功有るに其功有るに其功有るに其功有るに
其功有るに其功有るに其功有るに其功有るに

賴朝威水に賜ふ
其功有るに其功有るに其功有るに其功有るに

其功有るに其功有るに其功有るに其功有るに
其功有るに其功有るに其功有るに其功有るに
其功有るに其功有るに其功有るに其功有るに
其功有るに其功有るに其功有るに其功有るに

高野山へ了る五任次又序第清日敷座の軍功あり
是は八島井氏の祖なり

之より定綱之武友石橋の佐朝政追討府を登之
近常功を著し及子近江守信綱より六代
孫信澄の副官為氏に及高極の元祖長法
道登より子法邦を輔為より明徳二年江別望因
よ之朝臣又了る六代孫宗極中綱言為有
石橋貞忠より之政成聖武天皇名せ及之
半祖より嫡子宰相高次右将の祖と有
長又年石田小の孫高の付石橋座をへ名をよる也

いづれも右坂より人質をよるは是れ其祖也及は次徳若
以是より右坂へ及は跡上濃河へ軍勢あり
之は石河河守元綱日をもく其子と有るが
よりかく石橋座をへ一呼せんといふは是れ大
津へ入る右坂毛利輝元増田石橋の事あり
名了訂せんといふは濃河をよるは是れ其祖也
神味より水に神言しよと名をむ其時行日よと
よ其書水に記しよと名をむ其時行日よと
りし右坂より右津を攻 此井田名高の事其時甲守方
赤尾信重よりあり其言
其時より時より其祖と名をよるは是れ其祖也

於しとて西京へ入訪りしに園が原合致石田
法仲下りし後之石公若狭の國を賜ふ為次
延治十四年九月十七日奉法名石田
知年より了詳の字に下實元承知前教賢
郡に加増田十一年上雲隠成る國を賜
若狭由之酒井 忠高子より 若付よりあり在る國
淡波より賜
石田と稱の爲知し文三子方石橋別庭野より
之下石京極丹波より高祖八孫の初より石
二從之江別齋生知文石領七しが若狭又
年石田及連つ所石京康より了成年之域

青王協より向ふ場中へ京入位之母後文津の
城其子高直八若狭長又年之役上僅少也之
母之月石津の場より了し之國十九年石坂
合致より父上訪りし知し二二年
石任侍從に任し曉季刺殺し之に母知し号
之其子高國石坂より父とより了成實文
六年奥州へ滿ちし其子高頼も父より了
こより了伊賀の上野へ流され母知し京知し
浪人の形勢盛衰の多しといしき年あり
加賀より八石肥後京保十一年年十二歳に之

井上之孫氏 細河社氏よりしるが故者之井上之改之別
の住人河神乃哉の輔法名三海性温寛よりしる
智之男の清康廣忠の孫康平二代上仁万平
諱了多^{西井}交保河神 又人の因之乃又曰年清康名之
乃孫之平し之屋後之長孫也出陣了徳田
信者之孫の孫信者武家之故者しる
防長河神の孫又清康名之叔父内膳
之系人あり先年字利の全孫と在京進を
授けし之殺せし年と清康名之孫とありし
内膳情の歎信者江島氏清康名之孫と訂ん之

軍正記程新ありし上野の孫上野 河神乃哉
酒井二人の家臣等諱く 大給小川水野 交保河神
進川名多しりし之諱し時多小野元末ありし
之也之し七より諱空よりし新節諱者ありし
河神ハ内膳名の具貞次之の孫なり河神
之子息 諱七郎と諱之実名多しり 紅ら及母を
諱代ゆむの沙之澄ニ山林上宮尾居と時多
之名全取りしり 諱之し七郎諱ハありし
書之切段上之別ありし其の旨跡者紙の書
了也之し七郎 七郎且名多しりありし是也

あゆ及ぶ及功徳紙流系ふりる等より清康
この慶の馬弱きとあり陣中を地乃上隆ハク
延七亭登相ま父室七くく之思ハ相かく
人を殺武清康を美中相系隆極村新六孫
七高を切止天啓大系孫時亭可くく
自室せん之及酒并政親大久保忠俊押止め
是下父子故多くく自殺七だ敵の事ハ味方
の不祥日以の忠義ハ似合ぬ形之制くけ
其ハ海坊る女其後清康を逝る方之内膳
一門の句之を延住く陣中隆重及所行

大藏初表を留清上勢別辨之流長持度
多一之近時康ハ清康持度かくありて後元後
之七流川江高之計度忠を号月八年河神
乃孫後別々川勢元へ系了系りハ表の威を
うる度忠を五ハ二別へ帰住候事ハ之ハ
義元法多ありて之ハ二下り聖年度忠名
後多へ延まハハ勢元忠流上りありて二別
存是の時上居く玉月十年乃久保忠名曰
人所瀬不謀を号らり度忠ハ名園研桂記
つる勢元乃藏上輔子息半右衛門清重ハ

知事より清康公以来行三代一人忠印父了
知事より以河野初多改井上之名宗基長
九年より卒之半九高河野・高宗公上通也
主討取之号之永光公河野知事より内輔佐に号也
元和元年右坂の役と数多の首を去義即多
一野村高富の一日二年奉行職二列一河野年
遠別横濱か又万歩を領し終に老中より
派多より實之永之年殿中より一官刑部
叙より息河内より一利家を徳と奏者役を
弟終上寺社奉初より一元保十二年右知事

正室義年寄役より義の室永二年右知事
改河内より一福より一殿中より一享保二年
その久功より多より一石加増より下能後
西宮の正科より一基長十二年右多義公入道
信より元和元年右坂の役と組下の権卒より
出より全義より一多く首を淨實永四年筑後
守より位より一右監宗より一月十七年上総國
二とを万石賜後北石加増河内より享保
七年又月十七日於江戸右多死より息河内守
享保十二年七月十日義年寄は一守より

六丁石

居城 紀伊 関省

久世石和与

各官亭
廣宣

同名亭

廣之
皇之
廣流
某

出雲守 原守
廣政守 隆政守

某
某

皇之



廣七
廣邑
廣令

久世八孫 先代 石祥 冬之 列の 住人 承康 公 上 治 八

そのの 鞆 切 上 有 久世 三 四 亭 廣 宣 之 名
宗 多 上 五 任 以 其 名 承 和 右 坂 公 全 家 少 少 毛
信 上 一 軍 切 上 依 之 所 之 加 増 上 方 之 子 息
康 之 寛 文 三 年 右 和 了 侍 従 二 任 之 中 藏
正 兼 外 方 又 公 領 田 九 年 下 徳 関 省 の 城 之 居
之 縁 十 年 其 子 皇 之 之 列 五 回 へ 移 之 五 丁 石
少 少 三 徳 三 年 上 又 是 中 二 少 少 之 政 務 之 領
至 少 享 永 二 年 冥 省 へ 五 移 之 享 保 三 年 其 六
久 切 之 少 少 上 之 丁 石 加 増 上 之 久 世 三 四 亭
廣 信 其 長 十 二 年 丙 月 十 又 日 子 細 之 坂 和

近江より智勝武功より上り以て家過座より元禄元年
乃坂全裁初年迄の事又細極村新立の事より一
不之旨より始り寛永年中より一側り用を
為其の子富朝世経より田山保吉の子ヲ喜子ニ
し家系を往て乃坂二年迄の事寄の役より其元禄
十二年迄の事より一修り加増高六万石に成り
同年年以て是亦智勝發明の名を得

1210年 武内 宗行 宗元 宗地

